

建物は記憶の器

画家 有田 巧さん(65)
=熊本市

近況



存在感のある建物を水彩で描く有田巧さん

熊本市中央区

淡い色を重ねて、熊本市内などの古い建物を水彩画にした。店頭に品物が並ぶ商家、のれんが風でたなびくレトロな銭湯、木造の町屋…。画面に人の姿はないが、息づかいを感じさせる。専門は、しつこくに顔料で彩色するフレスコ画。約10年前から水彩画に取り組んだ。市内の新町・古町地区を歩き、重々しさがある個性的な街並みにひかれた。当初は思っような絵が描けなかったが、鉛筆を細いペンに変え、紙と絵の具の相性も研究。線の震えや絵の具のにじみを生かした。

描きながら気付いたことがある。「何でもなさそうに見える建物だが、よく観察すると実にユニーク。例えば、赤い屋根のはんこ店の隣に、青い屋根の理髪店が

ある。建物自体が主張しているようでかわいらしい」

熊本市現代美術館で館主催の作品展が開かれている(8月27日まで)。展示39点に描かれた建物のうち、半数近くが、後継者不足や熊本地震の影響で姿を消したという。「建物がなくなると、そこに何があったのか思い出せなくなる。建物は人々の記憶が詰まった器だと感じた」と話す。

地震後に描いた水彩画には、被災しながらも営業を続ける店舗がある。「どここい立っている」と感じたという。「理屈なしに建物に興味がある。描きたくなる建物を探したい」と意欲を見せる。

※26日から8月1日まで鶴屋百貨店でフレスコ画展も開く。(中原功一朗)